



世界は哲学で満ちている

私が本書を読んでいる時、ある友人は「哲学なんてよくやるなあ」と言ってきた。古臭

くてしかも何の役に立つんだかわからないじゃないか、とのことだった。なんのことはな

い、友人は哲学がどんなものか知らなかった

のだ。後に誤解は解けたが、彼女のようには哲

学は古い考えの研究をしているだけの学問だ

と思っている人は他にもいるんじゃないだろ

うか。そうではない。哲学はいつも新しい。

「自分が生きている時代を捉えるために、哲

学者は現在へと至る歴史を問い直し、そこか

らどのような未来が到来するかを展望するの

です。（本書より抜粋）」哲学はいつだって

「今」の問題を解決するために存在している。

では、哲学者が実際に考えている問題とい

うのはどういうものか。代表的なものとして

ITが人類にもたらす影響というものがあげられる。私たちはラインで友達とやり取りし、学校や会社関係のやり取りをメールでおこない、ICカードで電車に乗って、調べものはグーグルに頼る。それぞれの行動は逐一管理されているにも関わらず、普段それを自覚している人は少ない。それがどういうことなのか、  
  
本当に受け入れてもいいものか考える必要があるのではないだろうか。考えると聞いて身構えないでほしい。「観光客は無責任にさまざまなおまなところに出かけます。好奇心に導かれ、  
  
生半可な知識を手に入れ、好き勝手なことを言っただけで去っていきます。哲学者はそのような観光客に似ています。哲学に専門知はありません。哲学はどのジャンルにも属しません。  
  
それは、さまざまな専門を持つ人々に対して、

常識外の視点からぎよっとするような視点を  
一瞬なげかける、そのような不思議な営みで  
す。(東浩紀『弱いつながり』より) 哲学  
に専門知はなくてもいい。常識に囚われず考  
えればいい。やり方は本書の哲学者たちが教  
えてくれる。  
私たちが進歩に酔っている間にも世界は一  
つまた一つと問題を抱えていく。私は本書を  
読んでそれらと向き合うことを学んだ。先ほ  
どあげた例の他にも人工知能は危険か、クロ  
ーン人間は作っていいのか、資本主義はこれ  
からも通用するのか、宗教はどうなるのか、  
地球環境はどうなるのか、などについても哲  
学者たちは議論している。本書を読んで世界  
が抱えている問題に目を向け、哲学者達の考  
えに一度耳を傾けながら考えてみてほしい。  
哲学はこれから先、私たちが生きていく上で  
大事な道標になるだろう。